



子どものみかた (2)

前回のこころらぼで「困ったみかた」と「強みからみたみかた」について触れました。事実は一つであっても、みかたやとらえ方によって、問題を維持し続けるままであるのか、つながりながら解決のプロセスにすすむのか、それによって先々のことが変わってくる、という内容のことを書きました。

「強みからみたみかた」はとても大切な視点ではありませんが、実は大きな落とし穴もあります。それは「強みからみざる」こと、親の期待から子ども（自分の期待から相手）を信じすぎることによって、子どものおかれている現実が見えなくなってしまう、という落とし穴です。意地悪な言い方をすると「現実がみえていない」とも言えるかもしれません。現実が見えなくなると、現実に沿わない期待が大きくなったり、周りを悪くするようになってしま

い、本来、解決したいはずの状況、しんどい状況が長引いてしまうことにもつながりかねません。

今回もいくつかのケースを混ぜた例え話になりますが、以前に小学校低学年で軽井沢に転入してきた子どもがいました。前の学校では不登校とのことでしたが、言葉が出ず指差しやうなずきでのコミュニケーション、10分くらいは机とすに座っていることができても、すぐにその場を離れてさっと教室を出て、好きな水道のところに持って水を出して楽しむことに夢中になっていたような子どもでした。傍からみていると、私も学校関係者も「この子にとって、今、必要な課題や活動は他にあるのではないか」という状態でした。この状態に対して保護者の方は、「うちの子は言葉がでないだけ。周りの子の様子をみて動ける。先生が甘いから教室を出て好きなことをしているだけ。叱ってくれれば教室でみんなとできる。」という捉え方で、保護者の方なりに子どもの「味方」ではあったのでしょうが、子どもの発達を理解した上での「強みからみたみかた」はできていませんでした。様々な考え方や捉えがあ

り、これが正解ということではありませんが、少なくとも公教育という場において、この子にとって当時必要だったことは、「本人のペース、本人の興味のあることを通してコミュニケーション自体を楽しむ、人との基本的信頼を積み重ねていくこと。10分座って本人に必要な課題ができれば褒められる体験。やることが終わったら好きな水遊びができる、という「やること」と「やらなくてはいけないこと」の区別をつけて取り組む体験。本人のペースに合わせてつ1日の流れのルーティーンを身に付けていくこと」などが考えられるのではないのでしょうか。

「強みからみざる」ことや過剰な期待は、時に子どもの特性や発達課題の理解を妨げてしまい、必要な時期に必要な体験や学習ができなくなってしまうことにもなってしまいます。子どもの成長はあつという間です。親が子どもに期待することは当然ですが、その子らしく生きていく力を身につけていくためにも、落とし穴に陥らないように、いろんな視点から子どもの「強み」をみつけていけるといいですね。

**中央公民館**  
**新規グループ登録団体**  
**募集のお知らせ**

令和4年度から令和5年度分の申請受付について

中央公民館を主な活動場所とし、社会教育活動（学習・文化等）を行うグループについては団体登録をすると、無料で中央公民館を使用することができます。  
なお、登録は次の条件を満たす団体が対象となります。

- ・ 会員が町民もしくは町内勤務者で、6名以上（不特定多数は不可）
- ・ 営利事業ではない（塾も不可）
- ・ 特定の政党・宗教団体に偏らない
- ※スポーツ団体については対象となりません。

申請様式は、中央公民館窓口で配布および町ホームページよりダウンロードできます。

申請期限 3月10日(木)まで

【問い合わせ】 中央公民館 ☎45・8446

**町民親睦囲碁・将棋大会 中止**

例年2月に開催していましたが「町民親睦囲碁・将棋大会」は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止となりました。

【問い合わせ】 中央公民館 ☎45・8446